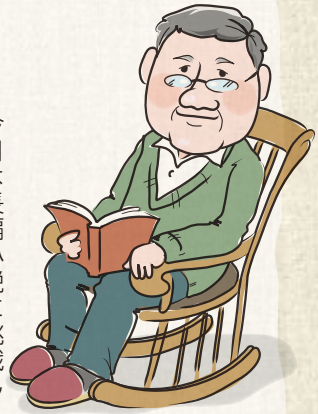
ワンダラーの読書日記

「凍える牙」

著者/乃南アサ
新潮社　￥740
発行/2000年2月
ISBN/ 978-4-10-142520-7



今月は長編小説に挑戦してみました。直木賞受賞のベストセラー小説です。：が、恥ずかしながら小生は、著者も作品もその存在をつい最近まで知らずにおりました。

主人公は音道貴子、警視庁第三機動捜査隊立川分駐所に所属する巡査で元白バイ隊員。その彼女が「立川時限発火ベルト殺人事件」と名付けられた特別捜査本部に配属になり、たたき上げの中年の刑事、滝沢保とコンビを組まされて捜査を開始するところから物語は始まります。事件の異常さを暗示するかのように焼死体の脚部からは大型犬に咬まれたような歯牙痕も見つかります。

物語の前半は、女性蔑視が色濃いオトコ社会の警察組織の中で、反目しあいながらも地道な捜査を進める二人の様子が淡々と綴られ、読者は物語に引き込まれていきます。やがて大型の犬に咬み殺されたと思われる殺人事件が2件連続して発生、二人はウルフドッグという、狼と犬をかけ合わせた犬種に辿り着き、そのオオカミ犬を殺人犬に仕立て上げた人物が捜査線上に浮かび上がります。この辺りから物語は急展開し始め、貴子は「疾風（はやて）」と名付けられたそのオオカミ犬に、いつしかシンパシーを覚えるようになります。

そして突然の出会いが「これが、疾風。オオカミの血を受け継ぐ犬。思っていた通りだった。強烈な存在感。威厳。気品。知性。貴子は、思わず歩み寄りたい衝動に駆られた。」

物語のクライマックスは立川からベイブリッジを経て幕張まで、貴子が乗ったCB400スーパーフォアが疾風を追跡するシーン。「ヘルメットの中で、貴子は大声で疾風に呼びかけ、そして、声を出して笑った。

：中略：誰かと一緒に走っていて、こんなに楽しいと感じたことはなかった。道路が続く限り、疾風と走り続けたい。あの、銀色の生き物を追いかけたかった。」映画化されているか調べたら、2001年にNHKが天海祐希主演で制作していました。天海祐希のレザースーツ姿が見たくて検索してみましたが、DVDの販売はされていないようです。

本題にもどって、結末を書くべきでないのは承知の上ですが、最後の標的を追い詰めた疾風が、猟友会のハンターの麻酔銃で眠らされてしまう場面は腑に落ちません。ゴルゴ13ならいざ知らず、猟友会のハンターごときに疾風が撃たれてしまうなんて！でも、感動的なエピローグをお読みになれば、著者の意図も解かろうかというものです。